

復興期の間にあつて忽焉として現れ忽焉として消れた彗星である。私共は彼の以前に一茶を見出すことが出来るが又彼の後にも一茶を見出すことが出来なかつた。實に彼は俳星中の妖星である而してその發する赫々たる光の光度は如何なるものにも敢へて譲るものではない。

—大正八年六月—

河

原

佐々木 高遠

「あゝ俺は何たる……」と彼は唇を噛みしめ乍ら呻くやうに呟いた。或時は辛く又悲しく或時は懐しく又戀しく思つた過去が、今は唯一色に灰色に見えた。否灰色とだけでは盡せない、夫れはあの人殺しの現場に送つた血の凝固し、こびりついたねば／＼した暗黒色だ。振り返る人を戦慄させる爲に、側を過ぎらうとする人を氣絶させる爲に、故意に拵へた造化の陷阱だ。惡戯だ。其の凄慘なまぐさい臭氣にあらゆる人を眩暈せしめようとして企てられた妖魔の手段だ。自ら底知れぬ死の谷に飛び込ませようとして肉迫する猛獸の毒牙だ。

「はッはッは、どうでもいいぢやないか」

初夏の蒸す様な陽光も既に傾きかけてゐた。晴れ渡つた空の奥にはぼんやり晝の月が顔を出して皮肉な苦笑を洩してゐる。其の白い月、大空に只一點据られてゐる其の白い月の穴を潜り抜けたら俺を雙手を舉げて待つてゐる神様がお人好しの神様がゐらつしやるのかも知れない、此の空間の向ふ側の世界へ行けたら、否

此の人間世界を脱する事が出事たら！否々俺だけちや駄目だ、彼女も其の夫も道伴れになくちや、畜生其の位ぢやおんなじだ、いらぬ他人の噂などするやうな奴等はひとり残らず坑に埋めるがいゝ。さうだ寧ろあらゆる物を破壊してしまへ、ダイナマイトの導火線に火をつけてみんな一氣に粉砕してしまへ。それが出来ない相談なら地球が彗星の尾に包まれて混沌たる霧の内に總てが消滅してしまふがいゝのだ。

此頃は會社の勤も怠け勝である。呪はれたる晝寢の夢に血のにんじだ荒い鋸の刃を頸に當てがはれたり、夢ならぬうつゝの幻ににがい汗をにじませたり、果ては覺えずとんきやうな金切聲を舉げ、むづがる幼兒のやうにバタ／＼疊に足を鳴したりする。夫れでゐて狂人か馬鹿にでもなつたらいゝのだが、苛責煩悶の斧鉞は高く振りかざれた儘で何時迄も地獄の苦惱を味はせようとなくらんでゐるのだ。

「ふゝん、死ぬがいゝ」

野路の行詰りが大川の河原だ。誰一人訪る、者もない雜草の野砂礫の原が彼の唯一の慰安所である。見棄てられた此の石原、陰慘と暗鬱の氣が集くつてゐる此の空地が彼の自由な憂悶悲歎の放ち場だ、慟哭所だ。鼠色の衣を纏うた妖精が其の鐵の棒を大地に打ち鳴らして襲うて來る時、彼は愕然として跳び上る、馳け出す、ふと踏み留まつては高らかに天を仰いで笑ふ。そして何時か此の人里離れた河原に來る。人の心に探りを入れて會心の横手を打つてはベラ／＼吹聴してゐる、せゝらぎの音、心の奥の塊に鋭き針尖を突き刺すやうな川千鳥の聲が一層心をいらだゝす。其の原の所々には黃泉の國の使者の様な月見草が惱ましげに咲いてゐる。かつては初心な處女の姿と見た其の花が今は倦怠と呆心を以てしごけない寢卷姿の儘横坐りしてゐる或種の者の影としか彼の眼には映じなかつた。始めて知合になつた當時彼女が髪にかざしてゐた月見草の美

しさが苦笑の檻の中から微にちらつく。

彼女と或温泉場で偶然知り合になつた當時のとや、人並の戀沙汰や、己むを得ぬ事情で強ひて中座した折の様な物足らなさと焦燥と運命的な悲哀を感じた別れのとなどが、或ロマンチックな懷しさや憧憬を以て眺められた頃迄は、ほんとに此の上ない幸福に在つたのだ、否當時の焦燥や憂愁さへ感じ得なかつた昔は、實はもつと一層恵まれてゐたのだと云ふ可きであらう。嗚呼然しもうどうでもいゝ、唯俺に今少しの意志の力さへあつたなら!! 當時俺の本心は自分の人格の尊さを叫ばぬのではなかつた。相手の人格を汚す大罪を諭さぬのではなかつたのだ。その上俺の理性は夙に結果を見抜いてゐたのだ。かうまでは杞憂としての淡い感じに過ぎなかつたにせよ、兎に角、俺は歸結の或苦悶を、決して見逃してゐたのではなかつた。而も俺は到頭負けた。何物を顧慮する力も失せてゐたのだ。俺は生眞面目な理性の前に平身低頭し恭しく感情擁護の強辯詭辯を逞うしては妥協を申し込んだ。よしや一時是が誤つた行であつたとしても俺は將來此の些事(?)から何物かを汲出して見せる、立派な實を結んで見せるからとさへ歎願した。あゝ……而して……確に其の實は結ばれたのだ。當然の歸結が降つて來たのだ。もう逃げてゐる隠れても駄目だ、泣いても喚いても仕方がない。

彼女の最近の手紙の一節が頭髮に燃えついた火の様にいら／＼させる。「此の頃何だか身軀の具合が變ですわ。宅はひとりで喜んでますけれど」只夫れ丈しか其の事に付ては書いてなかつたが、彼は即座に直覺して戰慄した。結婚して數年も子の無かつた彼女だ。其の僅かな文句の間に微見ゆる彼女の不安は彼の心を激動させた。心竊に悔恨の血溜りにのたうち乍らも圖々しい横着の假面を被つてゐた彼は之を讀んで苦惱のどん

底に陥つた。何も知らずに悦んでるといふ夫を思ふと苛責懊惱は愈々募つて堪へられなかつた。今こそ不幸な戀愛劇のクライマックスに立たされたのだ。

……かうした錯雜した關係になつた原因など今更詮索したくはない。全然彼女に罪が無いとは云へぬ。又全然彼の罪だと斷定するとも出来ない、彼が空乏な寂寞のどん底に落ちてからの呪はれたる煩悶を玆にくだしく説明する必要もないが性來多情な美貌の所有者として生れた彼女が故意にでなくとも彼を挑發して戀に導いたのは事實をつた。彼女は生眞面目な學究たる夫一人の相手を以て満足せず、情的な純な青年であつた彼を選んで自己の美の優越を一層強く享樂さして貰ひたかつたのだ。子を持たぬ彼女は若かつた。そして其の結果が當然の大團圓に來て彼女の既婚者である云ふ告白を聞かされた時、彼はどんなに恥辱と侮蔑の感動を受けたらう。欺かれてゐた、翻弄されたのだ。俺の熱愛に對して彼女からは果してどれ丈の愛を酬ゐられてゐたか？、あゝ、眞實の一片をもさうだ何物をも得てゐなかつたのだ!! 彼は忽ち幸福の頂から失意の谷底に突き落された。其の後彼の心には恐ろしい疑惑と憂悶とが起り更にのたくり廻る毒蛇の喘ぎと世紀末的な頽廢が續いた。

其の後一年許りして彼が再び彼女と或土地で會つた時彼はもう昔日の彼でなかつた。そして萬事が終つた絶望的幻滅が襲つて來た。而も自棄的な寂寥は又彼の意志も理性も爛らして了はずには置かなかつた……。

「あゝ俺は一体どうしたらいいのだ」彼は頂に組み合した兩手で強く頭を締めつけながら考へた。「俺は明かに大罪を犯したのだ。現に夫のあることを知り乍ら俺は盲目的衝動を抑ふべき何等の力も持たなかつたんだ。……俺の心は彼女の愛を占有してゐなかつたことを悟つた時の絶望以來惡魔的なバチルズの棲家と一

變した。俺は彼女の總てを暫時でも占有しようとする強烈な誘惑の全き虜となつてしまつた。そして自己の劣弱を蔽はんが爲に他の犬に遇へば先づ吠わつく犬のやうに、俺は自己の弱きが爲に強者の假面を被つた。道徳が何だ、因襲が何だ。勝手に捏ね上げた土塊に過ぎんではないか。一切は空だ、一切は虚無だ。俺はあらゆる物から解脱して本然の欲求に生き、必死の眞生活に入らう。俺は圖々しくもさう心の内で揚言した。あゝ賢明なる白痴よ。……だがほんとに俺はごうしたらいゝのだ。俺は既に他人の生活を破壊したのだ。彼女は最早普通の身体ではない。夫れは必ずしも俺のせいだと速断は出来ぬけれども又さうでない誰が斷言し得よう。彼女が只一度寢言にでも洩したらもうそれ限りだ、それで万事の破滅だ。夫は直ちに彼女を離婚するだらう、俺に對しても訴へ又公表して社會的に復讐するか、或はもつと恐ろしい態度に出ぬとも限らぬ。だがさうだ寧ろ彼女の夫よ、思ひ切つて復讐して下さい、心行く迄苦しめて下さい。さうしてもらつたら私の此の死ぬ許りの苦悶も幾分償へませう。そして彼女よ。私は貴女に眞實な愛を持たなかつた、私は貴女の幸福の爲に陰乍ら祈つてゐる敬虔な愛の奉仕者であることが出来ず、却て貴女を犠牲としたことを悲しみます。あゝ私は今更どうしたら此の大罪を贖ひ得ることか。私はやはり貴女の僕です、何でも致します。貴女の爲に代つて苦痛を擔はして下さい、私はいつでも自分の生活生命を捧げることが厭ひません……」彼は蹴るともなく足下の石を蹴つた。石はころ／＼と轉び乍らヂャブンと水に沈んだ。彼は其の音も深く氣に留らぬやうに尙考へつゝけた。「一体どうなればいゝといふのか。一度播かれた罪の種子は如何に自己が變らうとも永久の負債として、消し難い罪の刻印として殘留するのであらうか。……おゝ馬鹿者よ、何たる利己的な心配をするのだ。俺はあくまで悶へることによつてのみ救はれることを感ずる。……だが假に

つ飛ばなかつた。幽暗な静寂が次第に淀む様に見えた。彼は側の月見草の花を揉みつぶし乍ら喘ぐ呼吸を鎮めて、又じつと彼等ふたりを凝視した。十間位離れてゐるので彼等は氣附かなかつた。彼もふたりの辛うじて享樂してゐる平安を破りたくなかつた。彼は後じつと眼を閉ちて仰向けになつてゐた。ピストルや刀が閃いては消えた。眞紅の血がバツと迸つた。彼はあわてゝ頭を振つた。やがて鋭い赤子の泣き聲が聞えて來た。産婆が疲勞し切つて蒼白になつてゐる産婦の側で産湯を使はせる。「綺麗なお嬢さんですよ」と知らせると産婦は微に頷いて何か思ひ出したのか不安な眼を一寸見開いて又閉ぢた。

ジャブツ、ジャブツ……と云ふ水の音に始は産湯の音だと思つてゐたが急に高くなつたので驚いて眼を開くと、川の眞中に先刻の男が裸で突立つてゐる。膝から少し上位の淺瀬である。一たい何してるのだらうと思ふ。泳いでるのでも浴つてゐるのでもないやうだ。謎は益々深くなる。よく見ると手に何か持つて岸に曳いて行く様だ。網ではない。彼は覺えず立ち上つて近づいた。夕闇はだん／＼と黄昏の色を増して來て、水面は薄明りに微に波立つてゐるのが見ゆるばかり。やがて岸に上つたのをよくみると、何だか籠のやうであつた。彼は先刻來の好奇心と一は其の男の運命が自分と重大な關係を持つてゐるやうに思はれて心を抑へるとが出來ず頭つか／＼と近づいて行つた。向ふでは始めて彼を認めて一寸驚いたが微笑を以てむかへた。近よつてみると謎どころか何のこともない。其の男はたゞ魚籠を洗つてゐたのであつた。彼は今迄狐にでも化されてゐたやうに呆然としたが、怪しまれないやうにと臨機に、

「どうです、此のあたりは魚がゐますか」と問うた。「網をおうちになるのですか」

「いや、竿ですがね、魚はあまり居ませんよ。」とその男は愛想よく答へた。

彼が魚籠を覗くと小魚が十四許り入つてゐた。竿は今迄見なかつたが二本土手に横へてあつた。先刻來釣を止めて、ついて來た娘とふたりで休息してゐた所らしい。彼は「何だ馬鹿々々しい」と思つた、然し何となく嬉しかつた。眞暗な出口の分らない疑惑の洞から突然明るい空の下に出たやうに感じた。總ては心配なく過ぎさうな氣さへし出した。彼は

「釣はほんとに面白いものですね……失禮しました」と挨拶して歸りかゝつた。何時になく心が輕かつた。

東の空には月がひつそりと照り初めた。一帶の月見草が急に目覺めたやうに感ぜられた。冷い水氣を含んだ夕風に吹かれてゐると、水のやうな淋しさの底からまた、居ても立つてもゐられぬやるせない悔悟と戀しさが一緒になつてぐんぐんと胸に迫つて來るのであつた。彼のしつかと腕を組んだ姿、哀れにも蹙れた蒼白な頬には、人間性のどん底からにじみ出る血の汗のやうな苦惱のかけが、微な戰慄となつて流れた。彼の濕うた瞳には冷い月光がきらめいてゐた。

(八年六月一日舊作九年三月十一日修補)